我はいかにして途上国学徒となりしか

塩田 光喜

◉第一三話　虫瞰と鳥瞰の交錯（一）

―日露戦争から第一次世界大戦へ―

ここまで、ひた押しに「近世民衆虫瞰史」で押しとおしてきたが、ここで、物語の背景となる「近代日本鳥瞰虫」の視線を入れておこう。わが一族の物語のラビリンスに、読者の皆様、そして私自身が迷わないように。

「日本勝った。日本勝った、ロシャ負けた！　ロシアの弱い奴、また負けた！」

日露戦争後の何年も後にも、こうした流行歌が西讃岐の地では歌い継がれていたと祖母キクはよく歌ってくれたものだ。戦後民主主義の御世では御法度のような歌だが、日露戦勝後の日本の民衆はそれくらい意気軒昂だったということだ。

だが、司馬遼太郎の言うとおり日露戦勝は、実は薄氷の勝利だった。ポーツマス条約で、何とか勝利の形には持っていったが、日本はそれ以上戦う余力はなかった。勝利というよりも、ロシアで第一次ロシア革命が勃発して、勝手に敗けてくれたという方が事実に近い。エイゼンシュテインの傑作『戦艦ポチョムキン』が、当時のロシアの兵士と民衆の反乱を描いているとおりだ。

片山杜秀によれば、「日露戦争時に出来た巨大な外国債務（戦費二〇億円の半分の一〇億円）がのしかかって青息吐息で、大阪の北浜銀行をはじめ、名のある企業の休業や倒産も相次いで」（片山［二〇一二：二四］）いて、「経済破綻寸前というありさま」（片山［二〇一二：二五］）だったというのだが、近世民衆は一等国になったと誇りを持ち、祖母の歌っていたような意気旺んな歌が、戦後何年も歌われ続けたというのも虫瞰的にはまた事実なのである。

日露戦後、一〇年を経ずして、ヨーロッパで第一次大戦が勃発する。戦場から遠く離れた日本には、大戦は「大戦特需」として現れる。結果、大戦の四年間に「二七億四七〇〇万円がこの国に転がり込み」（片山［二〇一二：三〇］）「経済の規模が一桁ハネ上がった」（片山［二〇一二：三〇］）という。「成金が札びらを焼いて明かりにしたとか、普通の職工が時間外手当てをたっぷり貰って大店の若旦那同然の暮らしをし、廓から工場に通ったとか」（片山［二〇一二：三二］）という光景が大都市では見られたという。

祖母キクが、九歳から一三歳頃、泰田の家が、窮乏していた頃のことである。

（しおた　みつき／アジア経済研究所　貧困削減・社会開発研究グループ）

《参考文献》
●片山杜秀［二〇一二］『未完のファシズム―「持たざる国」日本の運命』新潮社。

昔の仁尾の灯台。賀茂神社の南東隅に建てられ、夜の漁をする漁船の目印となった